

# 自然保護の自然について

高橋 庄一

昨今は自然保護が大流行である。猫も杓子も口を開けば自然保護、自然保護とお題目を唱え団扇太鼓をたたいている。大変結構なことであるが、保護すべき自然とは何だろうと考えることがある。

自然とは何か、一口に自然を定義するのはむづかしい。広辞苑の自然の項目を引いてみると、おのずからそうになっているさま、天然のままで人為の加わらぬさま等々約1ページにわたり例文等が記載されており、かえって判らなくなってしまう。

7月に県立植物園で行われたシンポジウム「新潟の自然をどう守るか」に参加した。パネラーの先生方のお話を伺っても自然とはの話は余り出なかったが、最後の質疑応答の際に若い女性（植物分類学を専攻している大学院生）から自然をどうとらえるか、自然をどう定義するかの質問があった。

基調講演をされた石沢進博士の答えは「大変むづかしい質問ですが、生態系をふくめた自然環境」との答えであった。これも一つの立派な見識であると思う。自然を一口に表現せよと言うほうが元々無理な話である。

自然保護、自然保護とお題目を唱えている人々は先ず、自然とは美しいものであるとの前提条件をつけているのではなかろうか。確かに美しいと思われる自然景観もあるが、人間が眺めるのに都合のよい美しい自然の景観を残したい、守りたい、これは人間中心の考え方で人間の独善でありエゴでなかろうか。

重箱の隅を爪楊枝でつつくように、枝葉末節の事象を取り上げ、錦の御旗のごとくヒステリックに自然保護、環境保護を叫び、排気ガスを撒き散らし乍ら林道終点迄、車で移動し山を登っている。臍、茶でなかろうか？

自然界は生き残る為の過酷な生存競争の場であり、弱肉強食の世界で強者は生き残り弱者は淘汰され滅びる。これが自然の摂理であり、時の流れのうつろいとともにも種も移り変わり、生まれたり滅びたりの変遷の繰り返しこれが自然の姿であり、人間が眺めて美しい自然景観は偶々の神様からの贈り物でなかろうか。

自然保護とは美しい自然景観の現状を維持したいと言うことか？美とは何、現状維持が自然保護か？

昭和20年代後半から40年代にかけて新潟の海岸に月見草（オオマツヨイグサ）が多く見られたが、現在はアレチマツヨイグサに変わってしまった。新潟に「月見草を育て

る会」があり、その会のメンバーに頼まれオオマツヨイグサの苗を作ってやった事がある。その際にその人に貴女たちのやっている事は自然に逆行している。オオマツヨイグサが滅びアレチマツヨイグサに入れ替わったのは自然の変遷であり、その流れを人為的に替えようとする事は、自然の流れに竿さすことになるのではないかと苦言を呈した事があった。

美しい月見草を残して眺めたい。美の定義もむづかしいが、美しく人間が好むものだけを残して眺めたい。人間の都合だけを考えた人間のエゴであろう。

昭和50年代に九州の英彦山に登った。その際に、鉄道線路に生えていたキク科の植物を初めて見た。

名前が判らず電車待ちの女子高生に名前を聞いたらセイタカアワダチソウと即座に答えてくれた。始めて見る草であったが、今では蒲原平野に猛烈な勢いではびこっている。北アメリカ原産の帰化植物で始めは鑑賞用に入ったものらしいが、逸出して日本全国にはびこっている。外来の植物はオオマツヨイグサのようにある時期から減少し始めて、次に入って来る草と入れ替わる。植物の変遷は人間が考えるより速いテンポで移り変わっている。何が原因で移り変わりがいいのかは判らない、過密説、根酸に依る嫌地現象説等諸説あるが判らない。

お金にもならず、判ったところで役に立ちそうも無い事を研究したり、調べたりする人はあまりいない、金にもならず役に立ちそうもない事を研究したり、調べたりする事を学問と言うと故池上先生は言われていた。

冗談めかしての学問の定義、学問はしない事にした。池上先生には色々草の事を教わり深く感謝している。

昭和20年代から30年代にかけて飯豊の大日岳から御西岳の間にハイマツ帯があった。そのハイマツが地球の温暖化と共に森林帯の下草的存在であったチシマザサが亜高山帯から高山帯へと分布域を広げてハイマツ帯へ侵入し、ハイマツとチシマザサの生死を賭けた壮絶な戦争が始まった。草丈の高いチシマザサが勝利を手にし我がもの顔ではびこっている。ハイマツは樹高が低い為チシマザサに陽光を遮られて陽光を受けられず同化作用が出来無い、同化作用に依る栄養が作れなければ枯死するだけである。チシマザサが分布地域を上へ上へと広げた原因は地球温暖化による温度上昇で、その原因は人間の排出する温室効果ガス、ハイマツ絶滅の直接の原因はチシマザサとの生存競争に破

れた事である。チシマザサがハイマツ帯へ侵入したのは地球の温暖化にあり、その元は人間の生活にあり、人間が生きてゆくには化石燃料を燃して、温室効果ガスを排出する。地球が暖まり大日岳のハイマツが枯れ絶滅してしまった。

大日岳、御西岳にもっと高さがあれば、チシマザサが入ってこれない高さ迄、ハイマツは逃げて行ったのであろうが、高さが無く逃げ場が無かった。土の無い空中ではハイマツも根を張れない、どうしようもなく絶滅の道を辿った。

故池上先生、石沢進の両先生から大日岳御西岳のハイマツの写っている写真がないか、探してくれとの依頼を受けて10余年になるが、未だに見つかっていない、登山の際の記念写真でもよいが、背景にハイマツが写っていれば立派な証拠写真となる。大日岳、御西岳の間にハイマツ帯の在った証拠写真を是非入手したい。撮影年代が判れば更に資料価値は増す。御西岳、大日岳が写っていれば最高の証拠資料となる。

ご一報いただければ写真の複写に参上いたします。複写させて頂くだけですアルバイムから外す必要もなく写真を損傷する恐れもありません。宜しくご協力の程、お願い申し上げます。

チシマザサ藪の中に白骸骸として横たわるハイマツの残骸の記録写真は石沢進先生が保存されており、10月に所用で訪問したおりに、大日岳、御西岳の生きの良いハイマツの写真の入手再度頼まれた。鶴首待一報。

人間が生存し、生活していれば温室効果ガスの発生は避けられない。今使っている自動車は全部使用禁止、化石燃料も一切禁止、都市ガス、電気、水道等のライフラインが一切が止まったら人間社会は大混乱をきたすであろう。大混乱どころか人間は生存出来ないだろう。

最近、循環型社会と言われたが、新幹線も高速道路も無く、電気ガス水道等のライフラインも無かった江戸時代は、或る意味で理想的な循環型社会でなかったろうか。夜が明けたら起きる。日が暮れたら寝る。化学肥料が無いから人間の糞尿を肥料として米、野菜を作り、回虫等の寄生虫が豊富な野菜を賞味する。寄生虫のお陰で昔はアレルギー疾患は少なかったそうである。一番早い移動手段が馬に依る移動、工業製品も無かったから物を造る為の大量のエネルギーの消費も無かった。江戸時代の人間の熱量消費は現代の数百分の一であったろう。寿命が尽きたら死ぬ、管を付けて迄生きない、理想的な循環型社会であっても今更江戸時代の生活には戻れない。

可逆性の無い時の流れ、歴史の移ろいを変える事は出来ない相談であるが、自然環境に大きな影響を及ぼして現代の人間生活を見なおすときにきているのではないか。ケースビズ、ウオームビズだけでは間に合わない。

現在の大量の熱量を消費し乍ら快適な生活を送り、大量の温室効果ガスを排出し乍ら、自然保護、環境の保護を叫

ぶ、滑稽な事としか思えない。現代の快適な人間生活が大日岳のハイマツを滅ぼした。

地球が誕生してから幾つの生命が生まれ、幾つの種が滅びたのであろうか。羊歯植物が繁茂し爬虫類やアンモナイトが全盛を極めたジュラ期の生命の痕跡は化石で知るほかすべはないが、地球規模で考えると生命=種の変遷は激しく移り変わったのでなからうか。生命とは何か、と聞かれると更に判らなくなる。

間氷期の現在、氷河期の生き残りと言われている高山植物、特に飯豊の高山植物(寒冷地植物の呼び方が適切と思うが)は地球温暖化に依り、風前の燈である。大日岳のハイマツのように上が無いのであるから逃げ場が無い、逃げ場が無ければ絶滅の道を辿る。

自動車は止められない、寒ければ石油ストーブ、暑ければクーラー、自然保護、環境保護を声高に唱え、飯豊の高山植物を保護し残したいと叫び乍ら、快適な生活は止められない。虫の良すぎる話である。

宇宙船地球号にヒトと言う種の生物が殖えすぎてアンバランスな状態になり、自然環境にヒトの生存が大きく影響をおよぼし、今その自然からそのシッペガエシを喰らっているのではなからうか。

医学の進歩は個のヒトには大きく貢献し、長寿社会をもたらした、だが種のヒトにはどうであろうか？

淘汰されるべき遺伝子迄、次世代に持ち越す、種としてのヒトの弱体化を招いているのではなからうか。

又、戦争と言う一種の共食い現象、効率の良い原爆を使って、より適正規模までヒトを減少させる。恐ろしい事であるが、ヒトが生き残る一つの選択肢かも知れない。

昔、習った『質量不変の法則』『万物は流転する』が思い出される、宇宙空間の質量は不変であり、ただ形が様々なに変化するだけ、と悟りを開き、達観するべきであろうか。

故池上先生のお嬢さんより贈られた、生命学者柳沢圭子著「生きて死ぬ知恵」心訳般若心経に「宇宙は一つづきですから生じたということもなく無くなるということもありません。きれいだとか汚いとかいうことありません。「空」にはそのような取るに足りないことはないのです」不生不滅 不垢不浄 不増不減

JAC 創立百周年記念講演、小野健博士の地球の持つエネルギーの前における人間の無力さ、の一節が思い浮かぶ。ここいら辺りが答えになりそうだが判らない、ケ、セラセラ全てが『空』である。 終